

京芸通信

Kyo-gei
Tsushin

Vol. 019

京都市立芸術大学広報誌
2016年3月

特集

巻頭インタビュー | 鷺田清一 新学長

京芸，移転に向けて。

> 京芸の授業・講座

客員教授・特別講師による授業

> スペシャルインタビュー

音楽学部 作曲専攻 卒業生

酒井 健治

> 教員インタビュー

音楽学部 ピアノ専攻 講師

田村 響

> 京芸で、日本の伝統音楽に触れる

日本伝統音楽研究センター 教授

山田 智恵子

> リレーコラム

日本伝統音楽研究センター 准教授

武内 恵美子

> 芸術資源研究センターより

活動内容と取組紹介：森村泰昌研究員による
シンポジウム「ほんまのところはどうなん？アーカイブ」
／古橋隼二「LOVERS—永遠の恋人たち」修復事業 ほか

> 京芸1年間の出来事

第150回定期演奏会を開催／東京音楽大学との交流演奏会の実施／梅小路周辺設置モニュメントデザインを美術学部生が担当／京都芸大同窓会アートフェア 2016のお知らせ ほか

新学長

鷺田清一に聞く！

京芸, 移転に向けて。

哲学者・鷺田清一が京都芸大の学長に就任して約1年、過去に大阪大学の総長も務め、大学運営の舵取りに当たった経験もありますが、芸術大学の運営は今回が初めてのこと。そんな鷺田学長の目から見た、京都芸大の「今」と7年後に完了予定のキャンパス移転に寄せる想いについてお聞きしました。【聞き手: 森野彰人 美術学部准教授/全学広報委員】

「ガラパゴス化」という選択

森野 京都芸大は平成24年4月に公立大学法人化し、今は変革期にあるかと思えます。その学長の職に異分野から就任されて一年が経とうとしていますが、京都芸大についてどのように感じておられますか。

鷺田 ずっと総合大学に勤めてきましたが、美術、音楽、建築、写真、ファッションなど芸術系の友人はすごく多いです。また自分自身も芸術について執筆することが多々あります。学長就任以前は、京都芸大が法人化してから3年間、経営審議会委員を務め、財務状況や経営面は見させてもらっていました。ただ、初めて教育現場を見たのは、学長に就任してからでした。就任して2日目から教室を回り、授業風景や大学行事を色々見させてもらって、半原位経過したときに、この大学の教育には守らないといけない面がずいぶんあると驚きました。

大学法人化は、一見自由が増えるように思えますが、厳しい縛りが存在し、大学運営は非常に窮屈なものになりました。また、京都芸大は京都市からの運営費交付金で成り立っていますので、毎年予算の制約もあります。それを補うために外部資金の獲

得に努めても、長期的に安定して収入を得ることは難しいのが実態です。また、多額の税金が投入されていますので市による大学評価を受けることにもなり、評価委員の皆さんからは数値目標一辺倒で考えなくてもよいと仰ってはいただいているものの、どうしても微視的な視点で

の大学運営に陥りがちになります。すると、教育研究の根本的なところから離れてしまっんです。

社会は至近距離で物事を見ますが、大学の良いところは、距離をおいて物事を見ることができるところです。そして、そのように同時代の社会との距離をしっかりと見定めることこそが大学には求められていると思っています。同じ社会を同じまなざしで見るところではなく、複眼的に見るところで、その視差が大学教育では大事で、京都芸大にはそれがまだ残っています。他の大学に目をやってみても、それを失いかけているところが多いように感じます。

どんなことかと言うと、
① 授業の回数や、成績評価の基準をどうするかではなく教育に「手作り感」がある点
② 他大学のように専門分化していないこと。例えばこの沓掛に移転した時から美術学部で実施している総合基礎実技という授業がありますが、これは専攻を横断するような授業を行う中で芸術活動の土台となる基礎力の育成を図っているんですが、とても優れた取組です。専攻を超えた人間関係も築けて、卒業してからもそれが生きてくるわけです。





学長室は学生・教員・職員の「交差点」

③先輩後輩の繋がりももしかありある。総合大学では、部活以外にほとんど無いと思えます。

④教員、職員、学生の距離が近い。京都芸大のように職員が学生の活動を知る大学は少ないですね。

⑤制作室、練習室にこもりきりにならず、学生の活動が伸びやかに外に溢れだしている。例えば、学長室に昇るまでの普段使用する階段に変わった人形の作品が置いてあったりしましたが、教室には収まりきっていないですね。

「ガラパゴス化」という言葉を使うと反時代的なイメージを持たれるかもしれませんが、こうした教育の優れた面を「ガラパゴス化」して残していくことが私の目標の一つです。しかし、守っていくにはそれなりの予算が必要ですし、業務量も減らせません。経費削減も迫られる中、教員・職員がオーバーアチーブにならないように、良いところを守るため知恵を絞っていきたいですね。まだ、道半ばですが、このことが私のもう一つの目標です。



フレスコ画制作途中の学長室の様子

森野 学長室の装いが大きく変わりましたが、その狙いをお聞かせください。

鷺田 学生、教員、職員間のバリアが低いのが京都芸大の特徴ですが、その象徴にしたいと考えました。そして、本学に関わる人達が行き交う「交差点」にしたかったんです。だから壁面に作品を描いて明るい雰囲気にして、皆が集える場所にしようと思えました。

リニューアルを行うに当たっては、卒業生に制作をしてもらうことにしました。なぜなら、芸大生は卒業してからが大変なんです。美術では制作場所、音楽では練習場

所がなくなりまして、お金を稼げるようになるまでには、時間がかかります。だから卒業後のアフターケアが大事になってきます。制作してくれたのは修了生の川田知志さんですが、彼に制作してもらったのは、以前に彼の作品を京芸通信で目にして、それが気に入ったのでお願いしました。彼はフレスコ画が専門ですが、作品の性質上、今まで展覧会で展示しても、会期が終了すると撤去しなければならず、作品を形として残せなかつたんです。でも、今回は3箇月ぐらいかけてじっくり制作できて、作品も残せし、大学の移転後も新校舎



に設置することにしていて、
 ので非常に喜んでいました。
 フレスコ画なので壁に漆喰を
 塗る作業があったのですが、
 通りすがりの教員や職員、
 学生が参加していました。ま
 さしく「交差点の役割を果
 たしたわけですが、その制作
 過程も結果的に良かったで
 すね。私も筆をとって描きま
 したよ。おかげで学長室の空
 がほだけて温かくなった。皆
 がやってくる前かがやがや
 が声かしているような錯覚に
 陥ります。

今後については、残ってい
 る壁面を使って学生のギャラ
 リーにする予定です。マネジ
 メントは学生にしてもらい
 ます。学長室には、様々な人
 が訪ねてきます。他大学の学
 長、美術館の館長、出版社の
 編集者、企業人。その様な方
 の目に触れるので学生にとっ
 ても刺激になるかなと思っ
 ます。



2015年に元崇仁小学校にて開催した企画展「still moving」で展示された作品
 《文化住宅—作業室》石原友明崇仁ゼミ (撮影: 来田猛)

“大学移転” 京都芸大のミッションとは

森野 大学移転に関してで
 すが、大学内で昨年一年間を
 かけてコンセプトを検討した
 ところです。前回40年前に沓
 掛に移転した際に、美術学部
 では先程もお話に出た総合
 基礎実技(当時…共通ガイ
 ダンス)を導入し、新しい芸術
 教育の方法をスタートさせ
 ました。教育プログラムとし
 て、非常に良くできたもので
 はあるのですが、40年が経過

した今、見直しも必要だろう
 と思っております、その他に
 もこれからの京都芸大に何
 が必要かをよく考えながら
 移転を考えていきたいと思っ
 ています。鷺田学長が大学移
 転という一大事業を進める
 に際して、最も大事にしてい
 きたいと考えていらっしゃる
 ことをお聞かせください。

鷺田 ちょうど1月から全
 学的な将来構想の検討会を

始めたところですが、絶対に
 外してはいけないことは、京
 都芸大として将来に何をす
 るのかというディスカッション
 です。7年後の2023年度
 には新キャンパスの供用が始
 まるわけですが、それに向け
 て、今から京都芸大における
 教育のあり方、先生方のアク
 ティビティのあり方、大学が社
 会の中で果たす役割や機能
 といったことを、135年の
 歴史を踏まえつつ、もう一度
 根本的に考える必要があります。
 そして、その検討内容を
 これから本格的に始まる
 設計作業に取り入れ、生かし
 ていくことが大切です。建物
 の建設イメージ、学部やセン
 ターの位置取りは、その作業
 を踏まえた上で決めていくべ
 きです。他方で、今回の
 事業は、京都市の財政
 が年々厳しくなる中
 にあつて、とても大きな
 プロジェクトですから市
 民が注目していること
 も意識しておかないといけま
 せん。

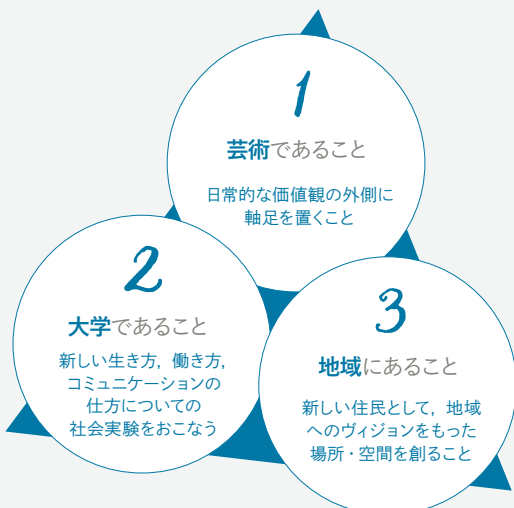
設計・建設に当たっては、
 有名建築家によるコンペで決
 めることはしたくありません。
 だからといって節約ばかり
 して京都芸大らしくない
 建物になってしまうのも避け
 たいところです。ですから、こ
 れからお金をかけずに、しか
 もぞくぞくするような魅力
 の溢れる芸大ならではの空
 間、そして建築家やゼネコン

に任せきりにせずに構成員
 も関わっていくような、新し
 い空間づくりの実験をやって
 いくことが、移転にあたって
 の本学のミッションではない
 だろうかと思っております。幸
 いなことに、本学の学生や教
 員はモノづくりに長けた人
 ばかりで、皆力を持っていま
 す。これからの社会の暮らし
 や街のあり方を考える絶好
 の機会になりますし、学生た
 ちを単にマンパワーとして動
 員するのではなく、自分た
 ちでこれからの社会におけ
 る望ましい空間の有り様を
 考えたり、卒業生も巻き込ん
 で、皆でこんな手もあるぞと
 いうのを考えてみて欲しいで
 すね。移転完了までにはまだ
 時間があるので、それから、世間
 が「えー」と言うような新
 しい方法を提案することが
 大事だと思っております。

それから、本学の場合、ど
 うしても実技が前面に出ま
 すが、芸術学もありますし、
 学科教育もあります。この学
 科教育についても根本から
 考えて欲しい。例えば、創造
 的な学びを実践する上で、教
 室のレイアウトは本当に今の
 状態がよいのか、体育にして
 も、本当に今の施設のあり方
 が大学で行う体育に相応し
 いのだろうかという問いがあ
 るべきです。移転を契機に、そ
 れぞれの原点に立ち返って
 みて欲しいと思っておりますし、
 京都芸大なら絶対できると
 考えています。

森野 崇仁地域に移転する
 ことで、本学も都市型の大学
 になるわけですが、その際に
 頭を悩ませることの一つに学
 生の住まいの問題がありま
 す。欧米の大学の中には寮を
 持っているところもあります

京都市立芸術大学が 果たすべき3つの役割



し、アジアの大学では高額な家賃をサポートする仕組みも見受けられますが、本学の場合、音楽の学生は部屋で練習をするから音が出ますし、美術の学生も絵を描いて部屋を汚すこともあるでしょうから、物件探しには苦労することが予想されます。こうした学生たちの住まいの問題についても地域とうまく連携して考えていく必要があるのではないのでしょうか。

鷺田 その点については、大学が窓口になり、空き家の所有者とうまくつないでいくような取組を入れる必要がありますが、ありそうですね。ただ、先生方の中には、最近の学生は交渉ごとが苦手な人も多いので、あえて自分で交渉させることも含めて学ばせてもよいのではないかとのご意見の方もいらつしやり、なるほどなどと思う部分もありました。

また、エリアに関しては、大学が所在する崇仁地域だけではなく、北側や鴨川を挟んだ対岸など、もう少し広げて考えていく必要があると思います。

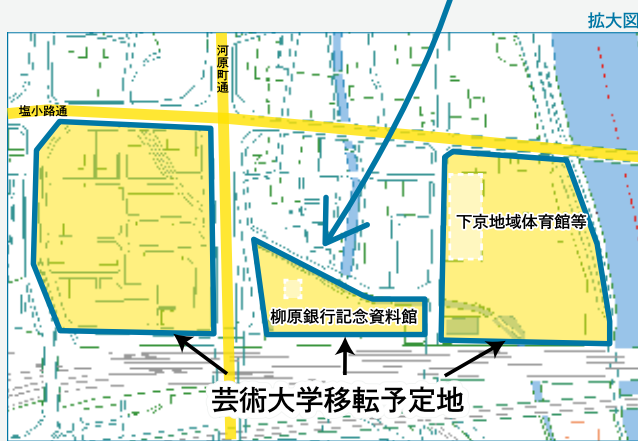
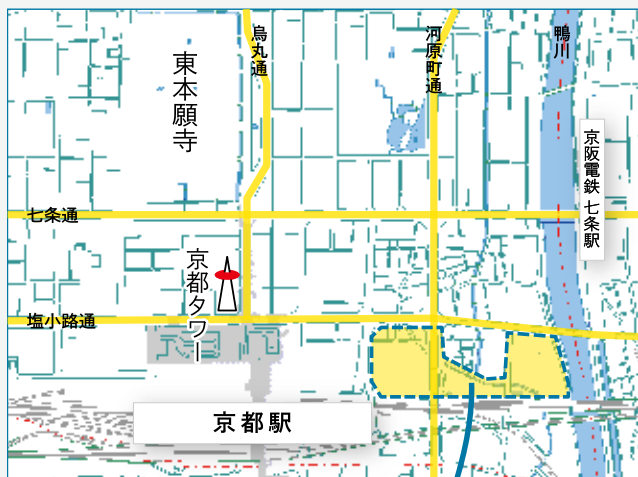
森野 学生たちが街中に暮らして、音楽や絵が日常生活の中に溢れるようになれば、ぱつと見て去大が来たことがわかりますし、芸術家が住んでいる街だと認識してもらえます。宮川町界隈を歩いているとお琴の音が聞こえて

きて、芸妓さんが練習しているというのがわかって風情を感じます。同じような感じで街に芸大生がいることを、学生が練習で奏でる楽器の音色を聞いてもらい街の人にも楽しんでもらえたらいいですね。

鷺田 大学と地域の関係性というものは、一般にイメージされる社会貢献のように、何かに対してプラスアルファの形で貢献ではなく、大学の日々の活動そのものが地域と『支え、支えられている』という関係の中でしか維持できないのではないかと考えています。そういう意味で、バリのモンパルナスのように、あちこちから集まった芸術家や思想家たちと街の様々な業種の人とが自分たちのできる範囲で支え合っているという雰囲気が街中にあるというのが一つの理想です。移転先の崇仁地域の歴史を大事にしたいし、地域がそのようになればよいなと思っています。

森野 仰るように、芸術家だけでなく思想家や色々な人が集える場所が必要です。日本も大正時代にはそんな動きがありました。今はそれ

ぞれの領域が分断されてしまつて、専門化していく中で相互の交流が失われてしまつています。ある種の理想郷ではないですが、大学移転を契機にもう一度、そういうものが生まれてくるといいですね。



“学長室プロジェクト”始動



一般公開期間中の学長室の様子

「学長室を人々が行き交う『交差点』にしたい」との鷺田学長の発案から出発した《学長室プロジェクト》。まず、壁面に並べられた本棚やロッカーなどの家具をすべて撤去することから始まりました。そして西側壁面全体に本学修了生の川田知志氏によるフレスコ画が描かれ、白を基調としたシンプルな空間に生まれ変わりました。

ですが、今後、学長が執務を行うために必要な家具をこの空間に相応しいものに置き換えていく予定です。

その第一弾として、美術学部プロダクト・デザイン専攻の牛田裕也講師がデザインしたコートハンガーが、ロッカーに換わって置かれています。

現在の学長室は、本年度の美術学部・美術研究科作品展の会期中（平成28年2月10日～2月14日）に、一般公開し、多くの皆様にご覧いただきました。

また、学生の作品を展示するためのギャラリーとしての活用も検討されています。全く新しいカタチの「学長室」を考える実験でもある「学長室プロジェクト」は現在も進行中です。

まるでギャラリーのような空間に生まれ変わった学長室

◎次頁に、フレスコ画とコートハンガーの制作者のお二人のインタビュー記事を掲載しています。



かわた さとし
川田 知志

本学非常勤講師
1987 大阪府寝屋川市生まれ
2013 本学大学院美術研究科修士課程絵画専攻(油画)修了

展覧会歴/グループ展
2015 京都市立境谷小学校作品展
京都銭湯芸術祭2015 玉の湯/京都市
夏休み企画展「ハイパートニックエイジ」京都芸術センター
1floor2015「対岸に落とし穴」神戸アートヴィレッジセンター
受賞歴
2011 京都市立芸術大学作品展 2010 市長賞

今回の作品のモチーフを教えてください。

モチーフはコチョウランです。この作品を手掛けることが決まったときに、大勢の人から「おめでとう」と声をかけてもらいました。こうした皆さんの気持ちを、どのように表現しようかと考えた結果、お祝いごとの際に贈られるコチョウランにたどり着きました。
黄色を選んだのは、以前にも度々使っていて、使い勝手をわかっていてというのが大きいです。鷺田学長がお好きな色ということも聞いてはいましたが、一致したのは偶然です。

今回の作品制作で試された技法などはありますか。

制作時間を十分に確保いただけたこともあり、以前から試してみたかった制作技法を使っています。
例えば、今回の規模(縦3m×横11m)ぐらいのフレスコ画を制作する際には、プロジェクターで投影する方法で下絵を描いてきましたが、初めて下絵を壁にトレースするやり方を試してみました。他にも漆喰の塗り方も工夫を凝らしています。

制作作業を通じて苦労されたことはありましたか。

漆喰をつくるには、原料の石灰と砂を混ぜ合わせるんですが、砂の種類や水分の加減はもちろん、部屋の温度や日照によって乾き具合も全く変わってしまうので、この部屋に適した成分配合に試行錯誤しながら取り組みました。

フレスコ画の制作はいつから始められたのでしょうか。

大学2年生の頃からです。シルクスクリーンやペンキを使った作品を手掛けることもありますが、フレスコ画が基本です。

最後に、今回の取組を制作者としてどのようにお考えですか。

今回の作品制作にはフレスコ画を学んでいる学生から、全くの素人の大学職員まで、本当に多くの人に関わっていて、その振り幅の大きさが面白かったですね。
貴重な経験をさせていただく機会を与えてくださった鷺田学長はじめ皆さんに感謝しています。ありがとうございました。

これまでにどのような作品を制作されてこられましたか。

工学部出身なので、構造的要素を持った動きがあるようなものを得意としてきました。なかでも、イスがソファになって、ソファがイスになる「XXXX_」は、MoMA や V&A など世界の主要ミュージアムの永久保存になっています。

今回の作品について教えてください。

作品名は「SHOW-OFF」といいます。日本語では『自慢する』とか『見せびらかす』という意味です。インターネットや SNS を使って誰でも簡単に自分の存在や主張をアピールできる現代社会において、私はこのコートハンガーという実際のモノを通して牛田裕也という人間を京都芸大の方々をはじめ多くの人々に知っていただけたらと考え、『私らしさ』を謙虚に見せびらかさせていただきました。

デザインのポイントはどこでしょうか。

制作に伴い学長にお話を伺った際に、『なるべく何もない空間にしたい』ということでしたので、できるだけシンプルなものに心がけました。従来の自立型のコートハンガーだと、どうしても空間の中での存在感が強くなるので、壁に立て掛けて使用するものになりました。また、縦横計6本の棒が1箇所で連結されており、その連結部分がアクセントとなっています。

新しくなった学長室に置いてみた印象はいかがですか。

正直、壁一面が黄色になるとは想像していませんでしたから、この空間の中ではとても印象が薄いようにも感じているのですが、そもそも「主張しないもの」を目指したので、結果には大変満足しています。

今後、京都芸大で取り組んでみたいことは。

ヨーロッパと比べて、日本はデザインの分野ではまだまだ後進国だと感じています。それは恐らくデザインという活動をなんだか難しいものと捉えている人が多いことや、供給者側の意識の持ち方にも少なからず問題があるからだと思います。そんな敷居を取り払い、デザインやものづくりをもっと人々に身近な存在にしていけたらと思っています。



うしだ ゆうや
牛田 裕也

本学講師
1998 中部大学 工学部 機械工学科 卒業
2009 Konstantin Grcic Industrial Design (ドイツ)にて研修活動
2010 Design Academy Eindhoven (オランダ), Man and Activity 卒業
2011 yuya vs design をオランダにて設立
2015 帰国
www.yuyavsdesign.com

世界の第一線に学ぶ

京都芸大では、毎年、美術・音楽各分野の第一線で活躍する方々を講師に迎え、授業・講座を開講しています。今年度に開講した授業・講座などの一部をご紹介します。

建島 哲 客員教授

2014年度まで本学の学長を務められた建島哲氏（現多摩美術大学学長）による特別授業が、7月23日に開催されました。「国際展とキュレーション」今年のヴェネチア・ビエンナーレをふまえて」と題した授業では、当時開催中であった「第56回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展」を視察した建島氏が、過去にヴェネチア・ビエンナーレ日本館のコミッションナーや日本国内で開催された各種国際芸術祭のアーティスティック・ディレクターを務められた経験を元に、今日の国際展のあり方を論じました。



建島 哲客員教授



森村泰昌客員教授と加須屋明子教授

森村泰昌 客員教授 特別招聘研究員

本学芸術資源研究センターが9月19日に開催したシンポジウムに、名画の登場人物や女優に扮したセルフポートレートで知られる、同センターの特別招聘研究員も務める美術家・森村泰昌氏が参加しました。シンポジウムは、今日の芸術文化において関心が高まっている「アーカイブ」をテーマに開催し、森村氏から投げかけられた「アーカイブ」に関する疑問に対して、5名の教員や研究者が答える形式で進められ、登壇者全員による討論も行われています。

竹本駒之助 客員教授

11月27日に開催した日本伝統音楽研究センターの第43回公開講座において、女流義太夫の太夫で唯一の人間国宝である竹本駒之助師が『仮名手本忠臣蔵』九段目切「山科隠家の段」丸一段を演奏されました。通常は、前半と後半に分けて上演される演目ですが、今回は特別に約85分の大曲を通して演奏いただきました。



竹本駒之助客員教授

森田りえ子 客員教授

日本画家の森田りえ子氏による特別授業を、11月27日に真澄寺院流齋院（京都市左京区）にて開催しました。同院は、森田氏が描いた非公開の襖絵を所蔵しており、今回の授業は同院の御協力により、この襖絵の前で行い、森田氏から解説していただきました。授業では、「京芸と私」恩師から学んだ心」をテーマに、森田氏の創作活動の出発点である京芸時代のエピソードや写生することの大切さについて語っていただきました。また、授業に先立ち、七代目小川治兵衛が手掛けた同院庭園の鑑賞も行い、学生と一緒に京芸友の会会員にも参加いただきました。



森田りえ子客員教授

中村 功 客員教授

8月10日から同月12日までの3日間、ドイツを中心に世界的に活躍中のパーカッションニストである中村功氏による集中講義を行いました。講義では、受講した学生に対して、豊富な演奏歴を踏まえて、打楽器を演奏する上で求められる身体の使い方や求める音のイメージの持ち方などについてレクチャーいただいたほか、学生一人一人に対して実技指導を行っていただいています。



中村 功客員教授

佐渡 裕氏

9月17日に、本学出身であり、国内外で活躍中の指揮者、佐渡裕氏を招き、オーケストラの特別授業を行いました。講義では、A・ドヴォルザークの交響曲第8番を演奏し、音の表現やテンポの取り方などきめ細かな指導を行っていただきました。



佐渡 裕氏



読売日本交響楽団(指揮=シルヴァン・カンブルラン)のヨーロッパツアーにおいて、委嘱作品「ブルーコンチェルト」の再演(パレ・デ・ボザール/ベルギー・ブリュッセル 2015年)

Prix de Rome (ローマ賞) 受賞

さかい けんじ
酒井 健治 さん

作曲家・本学卒業生

エ リザベート王妃国際音楽コンクール作曲部門グランプリや芥川作曲賞をはじめとする国内外の賞を受賞するなど、現在最も注目を集める若手作曲家の一人、本学卒業生の酒井健治さん。昨年、日本人作曲家で2人目となるローマ賞受賞者となりました。この快挙を記念して、近況や今後の活動についてお話を伺いました。

- skypeにて2015年12月21日実施
- 聞き手: 遠藤隆明さん(作曲専攻3年生・取材当時)

日本人のローマ賞の受賞は、1984年の佐藤喜美さん以来、二人目の快挙です。この栄えある賞の受賞は予想されていなかったか。

賞に応募するにあたり、同僚たちから選考方針等の情報を耳にしたこともありました。審査員の傾向も毎年変わるわけですし、特に当てにされたということはありません。それよりも、自分のキャリアが賞に値するかどうかが大切であり、今回賞をいただけたことは、これまでに積み上げてきたキャリアが評価いただけたということだと理解しています。

—— 昨年の9月からメデイチ荘に滞在され、創作活動に励まれておいてですが、ローマの印象はいかがですか。

素晴らしいです。実はこちらに来るまでは、イタリアという国については、例えば電車が時間どおりに来ないとか郵便物が届かないといったような、日常生活を送る上で少なからず不便を強いられるのではないかとイメージもあり、不安もありました。しかし、自分が滞在するメデイチ荘は、まずロケーションが素晴らしい、街を一望できる高台に建てられています。自分のアトリエからローマの街はもとよりヴァチカンをも一望できる。それだけで十分素晴らしいというのが率直な感想です。

自分が住まいとしているアトリエは、キッチン付きで約60平方メートルの大きさがあり、一通り生活できる環境が

整っています。楽器はフランスのブレイエル社製の古いピアノを用意してもらいましたので、毎日これを弾いています。

—— メデイチ荘では、日頃どのようにお過ごしですか。

メデイチ荘に滞在するアーティストは、それぞれ入居期間中にそれぞれ研究課題に取り組みことになっているのですが、私はイタリアのルネサンス期に活躍したカルロ・ジェズアルドという作曲家の作品をベースにした新作を書くというプロジェクトに取り組んでおり、その探求に時間を費やしたり、イタリア語も勉強しています。以前に暮らしたマドリッドよりは、ローマの人は英語がしゃべれますし、メデイチ荘の中はフランス語が通用するので勉強しなくてもいいかなとも思いつつも勉強しているところです。その傍らで、時間を見つけてピアノを弾いたり、外部から委嘱された作曲の仕事を رفتりしています。

—— 現在、メデイチ荘には何名のアーティストが滞在しているのでしょうか。

自分も含めて16人です。音楽家は自分以外に3人います。オーケストラ等のクラシック音楽を手掛けているのは私だけです。他の3人は即興演奏やインスタレーションといったような、もう少し美術寄りなアプローチの活動をしています。その他にも、画家、デザイナー、建築家、文学者、美術史家、映画監督、舞台演出家等が共に暮らして

ローマ賞 (ローマ・フランス・アカデミー滞在者資格) とは

ローマ賞は、作曲や造形芸術、文芸などに取り組み若手が在ローマ・フランス・アカデミーの本拠地、ヴィラ・メデイチに滞在して創作活動を行うための権威ある奨学金制度です。ローマ賞は1968年に廃止されましたが、その後、フランス政府によりメデイチ荘に滞在する若手作曲家のための奨学金制度が設けられ、これが一般的に現在もローマ賞と呼ばれており、毎年フランス文化省が奨学金給付者の選考を行っています。過去の音楽分野での受賞者にはベルリオーズ、ピゼー、マッスネ、ドビュッシーなど著名な作曲家が多く選ばれています。



ヴィラ・メデイチからの眺め

います。

これらの他分野の人と交流をしながら創作に励んでいるわけですが、このことこそがアーティスト・イン・レジデンスの最大の魅力です。私のアトリエの隣にはデザイナーや画家が同居しているのですが、たまにその部屋を訪ね、制作中の作品を見せてもらったりしています。普段は基本的に机に向かって楽譜を書いたり、演奏会のリハーサルに立ち会い本番を迎えるという生活が常ですので、異分野のアーティストと交流を持ちながら創作活動に励むという体験はとても新鮮ですし、それ以上にお互いのアトリエに対する考え方や美学を意見交換できるという点でも魅力的な環境といえます。

—— 交流の一環として、食事や他の住人と一緒にされることなども多いのですか。

食事は、基本は自分でつくりますが、週に一度、他の住人やディレクターとの食事会

が設定されています。それ以外にもクリスマス会などのイベントが組まれますので、そうした場も利用して交流を図っています。ローマはとにかく食事が美味しいですね。直前はベルリンにいましたが、アトリエを取り巻く環境は素晴らしいので、こちらに来てから助かっています。

—— メデイチ荘の滞在期間はいつまでですか。

基本は9月から8月までの1年間です。随分昔の話ですが、ドビュッシーたちが過ごした時代は5年ぐらいいつたようですが、現在はフランス政府の文化予算も減少しており、1年となっています。

—— メデイチ荘で曲を書くという経験は、ご自身にとって特別なことでしょうか。

曲を書くという行為自体は、日本であろうがヨーロッパであろうがどこに住んでいてもできることです。重要なのは場所ではなく、経験だと

思います。ローマで暮らし、メデイチ荘で他のアーティストと生活を共にする中で得られる経験こそが重要なことです。

——作曲を行う際、同世代の作曲家の楽譜を見たり演奏を聴かれることはありますか。

昔はありましたが、今はそれ程ありません。自分のやりたいことが確立してくると、同世代の作曲家の作品を聴くことの優先順位は次第に低くなってきました。今は同世代よりも若い世代が気になりますね。

——昨年と昨年に、日本音楽コンクールの審査員を務められました。感想をお聞かせください。

演奏会で演奏される楽曲は、同世代や年上の方の作品が多く、若い作曲家の作品を聴く機会が少ないので貴重な経験でしたし、非常に楽しかったです。自分個人の興味としては、20代半ばの若い作曲家達が何を考えて音に表現しているのか、音の向こう側にある若い作曲家の美学、ヨーロッパ音楽の伝統の捉え方、そして自分たちの世代との違いなどに注目して審査に当たらせていただきました。

——作曲活動に苦しさを感ずることはありますか。

学生の頃は、どれだけ考えても書けないということがあったかもしれませんが、そういうことは経験を積みだして自分なりの対処法を編みだしていくものです。スランプも当然ありますが、それを乗り

切る方法というのにも身に付けています。むしろ、今は作曲以外の仕事、事務などの多忙で、曲を書けない状態に置かれることが一番の苦しみだと思います。

——日本の伝統楽器を使った曲を書かれることはありますか。

仕事として過去に2度ほど経験した程度です。これは年齢の問題なのかもしれないですが、邦楽器を使ってみても、自分の中で納得するものがないままです。楽器が持つ日本的なものというコンテキスト（共示）を取り払い、純粹に音響学的な見地で捉えるアプローチも考えてみたりもしましたが、やはり使うからには邦楽器の持つ価値やコンテキストを尊重しつつ、自分のオリジナリティも反映させていくようなもう少し次元の高い方法で楽器を扱いたいという結論に至りました。しかし、自分の中では、まだその点に関する決着がついていません。この先、そういうことがわかってから取り組んでみたいと考えています。

——今一番力を入れて取り組んでいることを教えてください。

特に力を入れて取り組んでいるということはありません。それよりも普段の仕事一つ一つについて、作品の質を落とすことなく全力で応え、丁寧にこなすことを心掛けています。年々、大きなお仕事をいただくことが増えていますが、与えていただいた仕事を着実にこなしてきた結果



ローマ受賞者たち、メデイチ荘ディレクターと(2015年)

が、現在の自分のキャリアに繋がっているという感じで、自分から何か大きなことをやってやるというようなことは考えていませんでした。今後も2019年までに4〜5件のオーケストラ新作の仕事がありますが、周囲がチャンスを与えてくださったように思います。

——今後の日本での活動を教えてください。

今年の5月13日と14日の2日間、京都コンサートホールで京響向けに書いた新曲を披露する予定です。やっとな京都で大規模なオーケストラ作品を発表でき、嬉しいかぎりです。

関西でのオーケストラでの仕事は2012年のいずみシンフォニエッタで行った新作初演以来ですが、久々に三管編成の大規模なオーケストラ作品として仕事ができることを楽しみにしています。また、今回の委嘱内容は

少々異色なんです。X JAPANの元メンバーであり、ソロでも活躍されたギターリストのhideさんへのオリジナル曲を書くことになりました。hideさん関係のお仕事は実は2回目です。今から3年程前にトリビュート版CDに曲を提供してまして、そのことがきっかけで今回のお話に繋がりました。

——hideさんのファン層の方には酒井さんの楽曲はあまり馴染みがないようにも思いますが、その点はどういうにお考えですか。

今回の経験は、私にとってもチャレンジングなものです。プロデューサーの方からは、hideさんの楽曲を単にオーケストラにアレンジするというレベルではなく、自由に書いてくれて構わないという言葉をいただいています。何か新しいことをやってくれと言ってもらえたことは

大変ありがたく、作曲家が自由に自分の音楽を表現できる機会をいただくことができました。ただ、それだけでは仕事としての面白みに欠けるので、hideさんの既存の楽曲と自分の音楽性を擦り合わせることもできるかというチャレンジを自分に課すことにしました。また、聴きに来られる皆さんは、現代音楽を頻りに聴かれる層ではないでしょうから、その方たちにも満足してもらえる楽曲にしたいと考えています。

——最後に在校生や受験生にメッセージをお願いします。

学生時代はいわゆるモラトリアムとも言われますが、とても貴重な時間です。仕事をすることなく自分のやりたいことに多くの時間を費やすことができるのが学生の特権です。社会に出たらそのことを痛感すると思いますが、それがいかに貴重なことであるかということ念頭に置いて、学業や自分自身の創作に励んで欲しいですね。年齢を重ねてから思い知ることになります。20代の1年という時間は本当に貴重なものです。それだけに一日一日を大切に、全力を尽くして日々の生活を送られることを願っています。

公演情報

LEGEND SYMPHONY Vol.1 hide

2016年5月13日(金) 19時開演
14日(土) 16時開演

京都コンサートホール 大ホール

全席指定9,500円(税込)



©Maxime Lenik

酒井健治(さかい・けんじ)

1977年生まれ。京都市立芸術大学卒業後、渡仏。フランス国立パリ高等音楽院、ジュネーヴ音楽院、Ircam(イルカム=フランス国立音響音楽研究所)にて作曲、ピアノ、楽曲分析、電子音楽等を学んだ後、2012年9月マドリッド・フランスアカデミーの芸術部門の会員に選出された。ジョルジュ・ユネスコ国際コンクール作曲部門グランプリ(2007)、武満徹作曲賞第一位(2009)、ルツェルン・アートメンターファンデーション賞(2010)、エリザベート王妃国際音楽コンクール作曲部門グランプリ(2012)、文化庁長官表彰(国際芸術部門)(2012)、芥川作曲賞(2013)、ジョルジュ・ヴィルデンシュタイン賞(2013)等の国内外の賞を次々に受賞し、2015年5月フランス文化省によりローマ・フランスアカデミーのフェロー(ローマ賞)に選ばれた。また、X JAPANのhideへのトリビュートアルバムの参加やTV出演、日本音楽コンクールの審査員を務める等、クラシック音楽の創作に留まらない活動が目立っている。

たむら ひびき
田村 響

音楽学部ピアノ専攻
講師



ザ ルツブルク・モーツァルテウム音楽大学留学中、二十歳の若さでロン・ティボー国際コンクールで優勝するなど、国内外で活躍中のピアニスト・田村響講師にお話を伺いました。

田村響 (たむら・ひびき)
2015年大阪音楽大学大学院修士修了。同年より本学教員。2006年第16回出光音楽賞、2007年ロン・ティボー国際コンクール優勝、2008年文化庁長官表彰、国際芸術部門、2009年安城市市民栄誉賞、第10回ホテルオーケラ音楽賞、2015年文化庁芸術祭賞新人賞、愛知県芸術文化遺産文化新人賞。

——今年度から京都芸大の教員に加わられたわけですが、経緯をお聞かせください。
お話をいただいたのは、大学院の修了が目前に迫った時期で、修士論文の提出を終えて演奏試験の準備に取りかかっていた時期でした。私は京都芸大出身ではありませんし、関わりがあったわけではないので正直びっくりしました。お話をいただくまでは、専任講師として後進の指導にあたることは考えていなかった

のですが、今回のご縁に直感的にお受けすべきだと思いつ断らせていただきました。素晴らしい先生方の中に混ぜていただき光栄です。
——教員になられてからは、いかがお過ごしですか。
着任してから、1回生から大学院生まで11名の指導を担当しています。それと並行して自分自身の演奏活動も行っていますので、4月からは今までよりも時間の使い方ががらりと変わりました。練習



学生への指導の様子

時間が減りましたが、その中でやるのだという意志と気持ちが一層強くなりました。レッスンで生徒と接することでも良い刺激をもらっていると思います。

——実際に指導に当たられてみて、京都芸大の学生の印象はいかがですか。
真面目で優秀ですし、とても頑張っていると思います。言われたことをいち早く察知して体現する能力がありますので、もつと自発的に音楽を創造してどんどん自己発信してほしいと思います。生徒それぞれに個性や特徴がありますから、単に技術や決まった形を教えるのではなく、人間関係を育みながら、その一人ひとりの心と音楽が一致した音作りができればと考えています。

——ピアニストの道を本格的に目指すようになったのはいつ頃でしょうか。
明確に意識したことはないというか、敢えて意識しないようにしていたというのが正確かもしれません。でも、12歳の頃に教わっていた先生に初めてお会いした時に、「僕にはピアノしかない」と言っていたようです。
両親や兄が音楽をやっていたため、気が付くと当たり前の

のように音楽があり、幼い頃から無意識にピアノを弾いていました。コンクールも小学校1年生から受け続けていたもので、それが自分にとっての日常でしたし、止めたいと思っただけでもありません。壁が目前に現れたら、それを乗り越えないと気が済まないタイプでした。

——影響を受けたピアニストはいますか。
高校生の頃から、クラウディオ・アラウというチリ出身のピアニストの演奏を好んで聴いていました。多くの素晴らしいピアノリストがいますが、彼の演奏を聴くと、自分もピアノを弾きたいという思いに駆られます。演奏に行き詰まると少し音楽から離れたくなるのですが、そのような時でも彼の音楽を耳にすると思議とまた音楽に向き合おうという気持ちになります。

——海外留学や国際的な賞の受賞など、様々な経験をされていますが、ご自身にとっての最大の転機はなんですか。
ロン・ティボー国際コンクールに臨む前に大きな失恋をしました。しばらくは気持ちも沈んだ状態が続いたのですが、その時に自分の考え方を転換する本に出会い、無心になって読み耽る中で人間の



本質というものに思いを馳せるようになりました。
この年齢になると、練習として上手くなるかではなくて、音楽にその人の人生そのものが現れ出てくるものだと思います。自分自身を成長させないとしてこなし。毎日を生懸命生きるということ全部が経験になって、それが自分の音楽に反映されていく。順番としては、いかに生きるかということが先で、音楽はその後だと考えています。
——学生の指導で行ってみたいことは何かありますか。
鍵盤に向き合う以外の事を特に大切にしたいと考えています。
私自身クリスチャン家庭に生まれ、幼い頃から毎週教会に通い賛美歌や合唱などに触れていました。その環境があったからか、音楽と向き合う時は常に「神」の存在があります。宗教の種類はさておき、人生には神の大きな力が働いていると思います。試験やコンクールなど他人の評価が伴う機会の中でも、こうして音楽を続けられる感謝を忘れず、神の栄光を橋渡しする存在になろうとする気持ちを持える事がとても大切だと思います。どのような経験も糧にして人間としての成長を目指し、謙虚に強く賢く前に進んで行けるマインドをどのようにしたら築けるかを指導というより一緒に考え共有したいと考えています。
——プロフェッサーコンサートに向けて、意気込みをお聞かせください。
今回の演奏会は京都芸大に着任したばかりの私にとって、大学はもちろん地域に

馴染むきっかけの一つだと感じ、喜んでお引き受けさせていただきました。これまでも京都では何度か演奏させていた機会がありましたが、こうした大学主催のイベントで演奏することで、京都芸大の一員に加わったという気持ちも一層湧いてくると思います。
私自身まだまだ未熟者ではありますが、この京都の地に導いてくださった神様に感謝し、音楽家としてはもちろん一人の人間としてさらなる成長・発展を目指して精進したいと思っています。

公演情報

本学音楽学部専任教員による
プロフェッサーコンサート

2016年3月28日(月) 19時開演
会場：京都コンサートホール 小ホール
(アンサンブルホールムラタ)
出演：田村 響(ピアノ)

入場料：500円(全席自由)
チケット：075-711-3232(京都コンサートホール)
問合せ：075-334-2204(京都市立芸術大学事務局 連携推進課 事業推進担当)

Program

L.v. ベートーヴェン「ピアノソナタ第23番へ単調作品57《情熱》」、F. ショパン「スケルツォ第2番変ロ短調作品31」、「ワルツ集」より 他



ぎだゆうぶし 義太夫節を聴く力を育てたい

やまだ ち え こ
山田 智恵子

日本伝統音楽研究センター教授

義太夫節は、文楽人形浄瑠璃の音楽として、戦前ごろまで、多くの日本人が愛好するものの一つでした。落語「寝床」の「義太熱」に罹りそうに迷惑する人が、身の回りに沢山いたのです。ところが今は、ロミオの相方はジュリエットとわかって、では梅川は？と聞くと、「誰それ？」もしくは「何それ？」となります。正解は、近松門左衛門


作『冥途の飛脚(めいどのひきやく)』の登場人物で、相手は忠兵衛です。人形芝居である文楽は、最近字幕付き、初心者にはイヤホンガイドもあるのですが、わかりやすくなったという人がいるのが現実です。しかし、人形に目を奪われ、字幕の文字面を目で追うのに忙しすぎて集中できず、ましてや義太夫節を音曲として聴くのは難しいのです。「百聞は一見に如かず」といいますし、最近の状況からして、視覚的要素が優位なのは認めますが、義太夫節を音曲としても楽しむこと、聴く力を取り戻し、想像力を養うことは、義太夫節に限らず日本の伝統芸能にとつても大切なことだと考えています。

そこで私は、市民の方や学生に対して、義太夫節を聴いて理解することを目的として、テキストを音読した後、その部分の義太夫節を聴くという授業をしています。物語を理解するのはもちろんのこと、ことばの一つ一つに対して、義太夫節がどのように音楽として表現しているかを考えていきます。テキストを黙読ではなく音読するのは、音読することで初めて気付くことが多くあるからです。たとえば、七五調のことばのリズムや掛詞や発音のしかたなど、独特のものが多くあるのです。これらは、「語り」それを「聴く」ために工夫され

てきたといっても過言ではありません。今年度は、有名な『仮名手本忠臣蔵』の「九段目切山科隠家の段」を、作曲の院生と音読し、聴きました。11月に竹本駒之助客員教授による公開講座も開催予定だったからです。その授業にはイタリア人の客員研究員のG君が参加しました。彼はかなり日本語ができるのですが、自身でドナルド・キーン氏の翻訳を持参していました。浄瑠璃本文のことば、その語釈、キーン氏の翻訳英語、はてはイタリア語の音楽用語も飛び交って、とても楽しい授業でした。たとえば「わしや恥ずかしいなまめかし」という本文の「わしや恥ずかしい」は娘、小浪のことば(セリフ)です。「と、なまめかし」の部分は、浄瑠璃本文では主語がありませんが、キーン氏の翻訳では、ナレーターのことばであるとの解釈が加わり、さらに、「彼女は、なんてチャヤミングなのだ」となっています。「なまめかし」と「チャヤミング」は、日本人としてはちょっと語感が合わないように思いますが、「彼女は艶めかしい」と思っているのは浄瑠璃本文には登場しない「語り手」なのだといふことを表現しないといけないのが、英語と日本語との違いなのだ、いままさらながら私も気付かされました。義太夫節では語り手(太夫)は第三者として状況説明

もしますし、各登場人物の第一人称としてのセリフ、感情表現も瞬時に切り替えます。さらにいえば、「なまめかし」部分は、娘の人形が、袖で顔を覆い、品をつくるような仕草を表現する節廻し(雛型フシ)が付けられ、義太夫節でもその状況を表しています。また浄瑠璃では、「いそいそ」「うじうじ」など、いわば心理的オノマトベも多用されますが、これはキーン氏のすばらしい翻訳でも訳せず、説明的な文章になっていました。こうしたことをワイワイいながらの楽しい授業でした。

作曲の院生K君は、「この「忠臣蔵九段目」を何とオペラにしたいのか」とです。若い学生さんに義太夫節の面白さをわかってもらえるとは思っていませんでした。想定外の大変嬉しいことでした。どんな作品になるのか、とても楽しみです。

 Information

**日本伝統音楽研究センター図書室
(本学内 新研究棟6階)**

日本の音楽・芸能に関する一般書籍・古文書・楽譜・録音映像資料・楽器等を収集する専門図書室も備えています。専門スタッフがお手伝いするレファレンスサービスもあり、どなたでも閲覧可能です。是非お越しください。

<http://w3.kcuu.ac.jp/jtm/>
開室日時:水・木・金曜日10:00-12:00, 13:00-17:00

授業の様子





南風社の正面玄関

揚州の古琴工房

「南風」見学

日本伝統音楽研究センター准教授

たけのうち えみこ
武内 恵美子



琴を手作業で彫る職人

2015年11月、日本伝統音楽研究センターの幾つかの仕事のために上海に行きました。その中で主目的だったのが、今紹介する揚州にある古琴の工房、「南風」社の訪問でした。

古琴とは、中国の伝統楽器です。現在中国では古琴と呼ばれるのが一般的ですが、本来は「琴」一文字で、または七弦琴と記されました。伝説では中国の神話時代の8人の聖天子である三皇の伏羲が作ったとも、あるいは神農が作ったとも、または五帝に数えられる舜が作ったともさ



天井まで積み上げられた材料の古木

れる、非常に古い時代から存在する楽器です。数多くある中国の伝統楽器の中でも漢民族の楽器とされ、孔子が好んで演奏したことも知られるように、儒学や老荘思想とも関連し、君子すなわち皇帝が修得すべき楽器として特別視されてきました。

この楽器は日本にも輸入され、古来日本の音楽文化に大きな影響を与えてきました。古くは奈良時代に伝来し、東大寺の境内にある、聖武天皇の愛用の品々を収めた正倉院の宝物の中にも琴が含まれています。平安時代には貴族の教養として演奏されましたが、平安時代末期頃に衰退し、江戸時代になって武士や知識層を中心に再び演奏されるようになりました。しかし中国と同様に近代化の流れの中で演奏されなくなっていく、昭和には途絶えてしまいました。

日本には現在琴を制作する工房も職人もありませんので、琴を入手するには中国から輸入しなければなりません。今回訪問した「南風」社は、数ある琴の工房の中でも中国のみならず世界中から定評のある工房です。

南風社の工房は上海から高速鉄道で約1時間の鎮江南駅から更に車で1時間ほど、長

江を渡った先の揚州にあります。工房の建物が入ってすぐの部屋に琴の材料となる木が天井近くまで積み上げられており、その数に圧倒されました。すべて数十年は経った古木で、中には明代や清代のものもあるそうです。

工房はそれぞれ行程別に部屋が分かれていました。まずは倉庫の木から形を作り、裏側を彫っていく作業の部屋がありました。そこでは機械を使わずノミと槌ですべて手彫りされていました。次の部屋では前室で彫られた木に漆が塗られていました。鹿の角の粉を混ぜた下地を塗り、その上に漆を塗り重ねます。壁には漆を塗り終わったものを上下2段にピシッと並べて乾燥していました。



木枠に弦を張った装置を被せて音のチェック中



下地の漆を塗る職人

かぶせると音が鳴る仕組みになっていました。その状態で職人が細かく音をチェックし、具合の悪い部分に印が付けられると前の部屋に戻され調整し直すとのことでした。1台ずつ厳しいチェックを経て合格したものが最終の塗りを施され、最後に別室で乾燥されます。

昔ながらの手作りを守る工房で創りだされる楽器は、機械製には出せない奥深い絶妙な音が鳴ります。効率を求めることが主流な世の中でも、それに流されずこだわりを守ることが良い音への追求に繋がります。楽器はかくあるべきだと改めて感じました。



最後の塗を施し乾燥中の楽器



たくさんの琴が飾られた部屋

フル稼働、芸術資源研究センター！

平成26年4月に発足した京都市立芸術大学芸術資源研究センターは、美術学部、音楽学部、日本伝統音楽研究センター、附属図書館、芸術資料館という五つの学内機関を横断的につなぐプラットフォームの役割を担う調査・研究機関として、本学や京都に受け継がれ、日々新たに誕生する芸術作品や各種資料を「芸術資源」としてアーカイブの視点から包括的に捉え直し、新た

な芸術創造につなげることを目的に活動しています。センターでは、開設以来アーカイブ理論の研究、資料の調査収集と活用、アーカイブの教育の場での活用という基礎的研究をはじめ、多種の重点研究を推進しています。初年度からの重点研究は、「オーラルヒストリー」「記譜プロジェクト」「富本憲吉アーカイブ・辻本勇コレクション」「森村泰昌アーカイブ」(総合

基礎実技アーカイブ)の5つです。今年度からは、「法隆寺金堂壁画における複写と模写」「京焼海外文献アーカイブ」「映像アーカイブの実践研究」「音楽学部演奏記録アーカイブ作成調査」などが新たに加わりました。また、客員教授・特別招聘研究員の充実を図り、学内外に向けたアーカイブについてのシンポジウム・講演会・ワークショップ・研究会や、他機

平成27年度芸術資源研究センター開催の主な事業

開催日	事業内容	講師・パネリスト等(敬称略)
4/24	第8回アーカイブ研究会 「唯一のひとつを集積すること」	笠原恵実子(アーティスト)
6/8	特別授業(共催) 「3.11後に企画した展覧会とプロジェクト」	五十嵐太郎(東北大学教授)
6/16	フルクサス パフォーマンスワークショップ	塩見允枝子(特別招聘研究員)
7/23	特別レクチャー 「国際展とキュレーション」	建島哲(客員教授)
9/19	シンポジウム 「ほんまのところはどうなん『アーカイブ』」	森村泰昌(客員教授・特別招聘研究員) 佐藤守弘(京都精華大学教授)ほか
10/7,14, 21,28	特別授業「コレクションと芸術」 (4回連続)	彬子女王殿下(客員教授・特別招聘研究員)
10/18	レクチャーコンサート 「バロック時代の音楽と舞踏」	三島郁(本学非常勤講師) 赤塚健太郎(成城大学専任講師) 樋口裕子(舞踏家) 演奏:永野伶美・大内山薫・頼田麗・三橋桜子ほか
10/23	第9回アーカイブ研究会(共催) 「文化の領野と作品の領野」	石岡良治(批評家)
11/20	講演会 「イタリア未来派 芸術の革命」	ルチャーナ・ガリアノ(音楽美学者)
12/5	シンポジウム 「過去の現在の未来」	植松由佳(国立国際美術館主任研究員) 金井直(信州大学准教授) マルティ・ルイツ(サウンドアーティスト)ほか
12/8	第10回アーカイブ研究会 「映像民族誌とアーカイブの可能性」	春日聡(美術家)
1/18	第11回アーカイブ研究会 「歴史をかきまわすアーカイブ」	黒ダライ恩(戦後日本前衛美術研究家)
2/14	ワークショップ 「メディアアートの生と転生」	高谷史郎(アーティスト) 久保田章弘(多摩美術大学教授) 松井茂(情報科学芸術大学院大学准教授) 畠中実(NTT主任学芸員) 佐藤守弘(京都精華大学教授)ほか
2/17	講座「伝統音楽における記譜について」	藤田隆則(本学芸術資源研究センター副所長)
2/23	第12回アーカイブ研究会 「不完全なアーカイブは 未来のプロジェクトを準備する」	奥村雄樹(現代美術家)

関等との共催事業にも積極的に取り組んでいます。さらに、昨年8月には、メディア芸術連携促進事業「タイムベースト・メディアを用いた美術作品の修復/保存に関するモデル事業」を文化庁から受託し、本学出身でアーティスト集団「ダムタイブ」の中心メンバーであった古橋梯二氏(ゴブリッジ)が1994年に制作した作品《LOVERS》の修復を中心に、現代美術作品の修復と保存に関する研究を手掛けています。

この事業の一環として国立国際美術館において12月5日にシンポジウム「過去の現在の未来」を開催し、アーティスト・美術館学芸員・研究者がそれぞれの立場で、現代美術作品の保存や修復について考察し、スキルの獲得やマニュアルづくり、予算や人的体制の充実などの課題を洗い出しました。

2月14日には、元崇仁小学校においてワークショップ「メディアアートの生と転生」を開催し、修復された作品《LOVERS》を鑑賞するとともに、アーティスト・学芸員・研究者を招き、メディアアートにおいて何をどのように保存修復し、どのような情報をアーカイブ化するのかという

問題に参加者を交えて討議しました。これらさまざまな活動とおして活動の輪は着実に広がってきています。今後も、このようなシンポジウムや研究会、学内外の組織との共催事業を地道に重ね、成果を本学の教育や研究に活かすことはもとより、学内外の研究者や市民の皆様とも連携し、アーカイブをとおした新たな創造にチャレンジしていきたいと考えています。



シンポジウム「ほんまのところはどうなん『アーカイブ』」9月19日 京都芸術センターにて



シンポジウム「過去の現在の未来」12月5日 国立国際美術館にて



故・古橋梯二氏の作品「LOVERS」修復と保存に関する研究

平成27年度に6名の教員が着任

平成27年度に竹浪遠講師（総合芸術学）、中村翠講師（共通教育）、田村響講師（ピアノ）、三橋卓講師（日本画）、坂東幸輔講師（環境デザイン）、牛田裕也講師（プロダクト・デザイン）が着任しました。



竹浪 遠 講師



中村 翠 講師



田村 響 講師



三橋 卓 講師



坂東幸輔 講師



牛田裕也 講師

平成28年3月末に、3名の教員が退任

美術学部の伊東徹夫教授（総合芸術学）、音楽学部の龍村あや子教授（音楽学）、芸術資源研究センターの加治屋健司准教授が、平成28年3月末で退任となります。各分野で精力的に活動されながら、本学の教育発展に御尽力されたことに感謝し、今後ますますの御活躍をお祈りします。



伊東徹夫 教授



龍村あや子 教授



加治屋健司 准教授

サイレントアクト 2015 を開催

東日本大震災の復興に関わる活動を行っている団体等を広く支援することを目的として、京都市立芸術大学 SILENT@KCUA 実行委員会が平成23年から開催しているチャリティオークション「SILENT@KCUA（サイレントアクト）2015」が、平成27年9月12日から23日まで開催されました。会期中約1,400名の方にご来場いただき、卒業生・在学生の皆さんに出品いただいた作品を多数落札いただいています。

必要経費を差し引いた収益金は、同実行委員会による厳正な審査の下、一般社団法人対話工房、あいづまちなかアートプロジェクト実行委員会、アンテナデザインユニット、社会福祉法人NHK厚生文化事業団の4団体の他、本学学生の芸術活動への支援金として寄付いただいています。



京都駅と梅小路公園周辺までを結ぶルートに設置するモニュメントのデザインを本学学生が担当

京都駅の西側に位置する梅小路公園周辺は、今年4月に京都鉄道博物館のオープンが予定されており、これを機にこれまで以上に人々が集い、楽しめる空間となることが期待されています。本学では、産学連携の一環として、当エリアのにぎわい創出や回遊性の向上に取り組む「京都・梅小路みんながつながるプロジェクト」（西日本旅客鉄道（株）京都支社、京都水族館等23社で構成）と連携し、京都駅から梅小路公園周辺地域までを結ぶルート上の15箇所に設置するモニュメントのデザイン制作を担当しました。

学内公募による応募作品の中から、同プロジェクトによる厳正なる審査の結果、学生7名の手による15作品が選ばれ、11月16日にお披露目と表彰式が開催されました。「ドキドキ・ワクワク」をテーマにデザインされた作品は、SI義経号やハンドウイルカなど、鉄道と水族館にちなんだもので、鉄道博物館開業に合わせて、今回選ばれたデザインを基にしたブロンズ像が制作され、モニュメントとして設置されます。





音楽学部・大学院音楽研究科第150回定期演奏会を開催

大学の前身である京都市立音楽短期大学設立の翌年、昭和28年にスタートした音楽学部・大学院音楽研究科による定期演奏会が、平成27年12月18日の開催回で150回の節目を迎えました。これを記念して、ゲストに国内外の第一線で活躍する卒業生4名（菅英三子氏：ソプラノ、福原寿美枝氏：アルト、清水徹太郎氏：テノール、黒田博氏：バス）を独唱陣に招き、尾高忠明客員教授の指揮によるベートーヴェンの「第九」を演奏しました。京都コンサートホールで開催した演奏会には、多くの方に御来場いただき、満席となった客席からは盛大な拍手とともに、熱烈な称賛をお送りいただきました。

東京音楽大学との交流演奏会を東京で開催

音楽学部・大学院音楽研究科では、平成25年に東京音楽大学との間で大学間交流提携をスタートさせており、平成26年度に初めての交流演奏会を大阪のザ・シンフォニーホールにて開催しましたが、平成27年度は11月7日に本学学生が東京音楽大学を訪ね、吹奏楽交流演奏会を同大学100周年記念ホールで開催しました。

当日は、約450名の聴衆を前に、両大学それぞれに演奏を披露したほか、本学の増井信貴教授の指揮により、D・ショスタコヴィチの祝典序曲を合同で演奏し、交流を図りました。

平成28年度の演奏会は、7月10日に今年1月にオープンしたロームシアター京都で開催する予定です。



本学ゆかりのクリエイターや演奏家が様々な“ギフト”を提案「THE GIFT BOX 2015」を開催

本学キャリアデザインセンターでは、在学生と卒業生のキャリア支援に向けた取組の一環として、12月23日（水・祝）と24日（木）の両日、「THE GIFT BOX 2015 アーティストが提案する特別なギフト」を京都文化博物館別館ホールで開催しました。

イベント名に冠した「ギフトボックス」は、会場を巨大なギフトボックスに見立て、来場者の皆さんが、アーティストが発信する芸術性に触れることで、日常よりも少しだけ特別な作品や演奏といった“ギフト”を受け取っていただける様子を表現したもので、3回目の今回は、2日間で合計約1,800名の方にご来場いただき、出展した本学在学生や卒業生の手による工芸品やアクセサリ、雑貨等に触れていただくと同時に、音楽学部の学生・卒業生によるミニコンサートをお楽しみいただいています。



「死の劇場-カントルへのオマージュ」展会場風景（撮影：来田猛）

外部資金の獲得により、様々な事業を実施

本学では平成24年の公立大学法人化を機に、民間企業等との連携・協力の推進にこれまで以上に力を入れて取り組んでおり、平成27年度もこれらの資金を活用して様々な事業を実施しています。

平成27年度は、新たな事業として、文化庁やアサヒグループ芸術文化財団など合計7団体からの助成を得て、ポーランドの異才タデウシュ・カントルの生誕100周年を記念した「死の劇場-カントルへのオマージュ」をはじめ、文化庁から「メディア芸術連携促進事業」を受託し、「タイムベースト・メディアを用いた美術作品の修復/保存に関するモデル事業」に取り組み、故・古橋悌二「LOVERS-永遠の恋人たち」の修復やシンポジウム等を開催しています。

また、国の科学研究費補助金等の申請にも積極的に取り組んでおり、平成24年度から平成28年度の5箇年の申請件数は76件になります。



京芸大オリジナルグッズ第2弾を販売中です。

本学で学ぶ学生はもとより、広く一般の方々にも本学への愛着を深めていただくために、京芸大オリジナルグッズとして、今年度は美術・音楽両同窓会のご支援のもと、新たにクロッキー帳と五線譜ノートの販売を開始しました。デザインはそれぞれ2種類ずつで、美術学部ビジュアルデザイン専攻卒業生がデザインを担当しました。学内売店「リブレ」で販売しております。

写真上:五線譜ノート(2種 各298円/冊 *税込)
写真下:クロッキー帳(2種 各392円/冊 *税込)

「京芸大同窓会アートフェア 2016」が開催されます。

美術・音楽両学部同窓会による大学移転支援事業「京芸大同窓会アートフェア2016」が、3月26日(土)から4月3日(日)にかけてギャラリー@KCUAで開催されます。

今回のフェアは、オール芸大同窓会による取組で、美術学部同窓生246名が出展する約300点の作品を入札・販売し、収益金は本学の移転支援のためにご寄付いただきます。最低入札価格は1万円で、以後1円単位で自由に入札価格を設定いただけます。会場での入札以外に、WebやFAXもご利用いただけますので、皆様のご参加をお待ちしております。フェア期間中は、音楽学部同窓会「真声会」の会員によるリレーコンサートも開催されますので、是非会場にお立ち寄りください。

また、本学では大学内に基金口座を設置し、移転を継続的に支援いただくため、両同窓会と協同して実行委員会を組織し、大学移転整備に向けた寄付金を募ってまいります。

京芸大同窓会アートフェア Web サイト <http://www.kcuu.ac.jp/artfair/>



京芸大を御支援くださるみなさまへ

京芸大では、教育研究等の充実を図るため、平成25年3月に「京芸友の会」制度を立ち上げ、広く一般の皆様からの御寄付を募集しております。

御寄付をいただく際には、「教育研究活動への助成」「大学主催の展覧会、演奏会、公開講座等への助成」などの支援メニューから用途をお選びいただき、皆様の御意向を踏まえて活用させていただきます。

御寄付をいただいた方には、手続きを行うことで税控除や損金算入の措置が受けられる場合があります。また、一定の金額以上の御支援をいただいた方には、本学主催の定期演奏会への御招待やオリジナル特典を御用意しております。詳細は、大学ホームページを御覧ください。問合せ 京芸友の会担当 電話:075-334-2200



寄付金を活用した学生による選書ツアーの様子



過去に購入した書籍・楽譜・CD等

編集後記

鷺田学長を大学のトップに迎えて、早一年が過ぎようとしています。この間、学内では、7年後に控えた大学移転を見据え、移転に関するコンセプトの検討等が教職員の手により精力的に進められているところです。今回の19号では、学長就任以来、一連の議論を牽引する鷺田学長へのインタビューを行い、哲学者の目に映る京芸の「現在」と目指す「将来」について語っていただきました。今日、大学運営は様々な変革の波に晒されていますが、京芸が長年の歴史の中で培ってきた「良さ」が移転後も受け継がれていくよう、鷺田学長を先頭に励んでいきたいと考えています。

京都市立芸術大学
全学広報委員会一同

Contribution

御寄付をいただきました皆様への感謝の意を込め、お名前を掲載させていただきます。

西尾商事有限会社

ローム株式会社

個人の皆様からも、多数の御寄付を頂戴しております。ありがとうございました。

※ 2015年1月から12月末までに御寄付をいただいた皆様のうち、公表を希望された法人・団体等の方のみ記載